

チャンス到来！かごしまブルーツーリズム ～漁家民泊を通じた地域興し～

垂水市漁業協同組合 川畑 興文

1 地域の概要

垂水市は、勇壮な桜島の麓に位置し、温泉付き道の駅「湯っ足り館」、猿ヶ城溪谷などを有する人口約 16,000 人の水産業を基幹産業とした風光明媚な市である。

2 漁業の概要

垂水市漁協は、組合員数 624 名（正 395 名，准 229 名）で構成され、主な漁業はカンパチ養殖業で、その他底びき網，小型まき網，さし網，一本釣り漁業などがある。主産業である養殖カンパチ生産量は年間約 4,253 トン，生産額約 36 億円(平成 26 年垂水市漁協業務報告書)で今や日本有数のカンパチ生産地である。

また、垂水市漁協の養殖カンパチは平成 16 年 7 月に「かごしまのさかな」ブランド第 1 号に認定され、同年 11 月には地元子供たちへの一般公募で「海の桜勘」と命名された。平成 17 年 2 月には商標登録に至り、同年 5 月に漁協直営レストラン「味処桜勘」がオープンし、現在でも多くの方々が利用している。



図 1 垂水市漁協の位置

3 研究グループの組織と運営

私は平成 10 年に地元高校を卒業し、2 年間県外で建築業に従事した後、垂水市で父が経営している(株)丸庄水産で養殖漁業に従事し、その後平成 22 年から兄とともに(株)丸庄水産の代表となった。私が代表を務める(株)丸庄水産は昭和 30 年に底びき網漁業から始まり、昭和 48 年にブリ養殖，平成 5 年からカンパチ養殖，平成 23 年から小型定置網を併せて営んでいる。現在は従業員 14 名で小型定置網とともに魚類養殖生簀を垂水に 39 台，東桜島に 58 台，計 97 台所有し，ブリ，カンパチ等の養殖業を営んでいる。

また、私が現在取組んでいる漁家民泊は、平成 22 年に垂水市や漁協，観光協会，商工会を構成員として発足した「垂水市ツーリズム推進協議会」が取組み始めた修学旅行受け入れに私も当初から積極的に参画し、現在に至っているところである。

4 研究・実践活動取組課題選定の動機

私がまだ(株)丸庄水産の従業員だった平成 19 年頃は魚価の低迷，燃料費や餌代の高騰等でカンパチ養殖業は非常に厳しい状況であった。このため地元水産業の活性化に向けて何か出来ないか，漁業経営以外の事業で経営の健全化に取組めないかと苦心する日々が続いていた。

そういった中で垂水市の産業は水産業だけではなく、桜島を望む風光明媚な景観や温泉など観光資源もあることに着目し、この頃すでに南薩などで行われていた修学旅行受け入れを垂水市にも誘致し、さらには漁協で漁業体験をさせることにより収入を得て、漁協経営の健全化を担うことが出来ないかと考えた。

また、当時は鹿児島県観光連盟が主体となって修学旅行受け入れのガイドラインを作成し、他の地区で自然体験や平和学習、農業体験の体験学習が行われていたが、新たに体験学習とツーリズムを併せた民泊体験ができないかと模索しており、そこで餌やり体験ができ、JRや空港から近く、桜島が眼前に迫り時化も少なく天候も比較的安定した地の利を活かせる垂水にスポットが当てられ、ステップアップを目指した体験学習を目指して鹿児島県観光連盟と漁協との間で協議が重ねられた。

さらに漁協の理事たちが中心となって鹿児島県観光連盟に働きかけて協力を頂き、山口、広島、大阪、東京などの旅行代理店への説明会や各学校への説明会へと営業活動に廻った。垂水市も平成 22 年に発足した「垂水市ツーリズム推進協議会」を中心に、同時に民泊受け入れ家庭の登録や育成も同時に進めることとなった。併せて民泊受け入れ予定の家庭には食中毒対策や危険の無い民泊プログラムの研修を行うなど、受け入れ体制の整備を進めていき、民泊がスタートした。

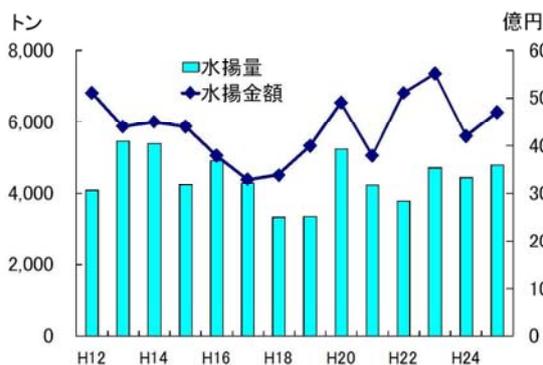


図 2 垂水市漁協 養殖カンパチの生産状況



写真 1 学校訪問(広島市内の中学校)

このように漸く垂水市全体で民泊に向けた第一歩を踏み出すこととなり、私は、修学旅行生に垂水市が水産が盛んな町であることを広く知ってもらおう、漁業を実際に体験してもらい水産に親しみを持ってもらおうと思い、修学旅行受け入れに積極的に協力しようと考えた。さらに副業的ではあるが民泊受け入れで経済効果も期待できるのではないかと、水産業だけではなく地域全体の活性化に貢献できるのではないかと前向きに考え、平成 22 年度から民泊受け入れの登録に向けた各セミナー等にも積極的に参加し、漁家の受け入れ民泊第 1 号として垂水市のブルーツーリズムの推進に取り組むこととなった。

5 研究・実践活動の状況及び成果

(1) 民泊受け入れの推移

民泊の受け入れは、まず学校側と旅行代理店が契約を結び、旅行代理店から鹿児島県内で民泊の受け入れ窓口となっている「NPO 法人エコリンクアソシエーション」を通じて垂水市ツーリズム推進協議会窓口にお問い合わせが来た後、窓口が登録済みの民泊家

庭に募集して振り分ける流れとなっている。

民泊に来た第1号は平成22年11月の広島市立長束中学校で、私も生徒3人を初めて受け入れた。これを機に垂水市では年々受け入れ件数や民泊数も増加し、平成22年以降の5年間で48件の修学旅行の民泊を受け入れており、そのうち私の家でこれまで延べ39件の民泊を受け入れてきた。

また、垂水市に来た学校の都府県別では、民泊をしない漁業体験のみの学校も含めて、大阪府、兵庫県、広島県を中心に近畿地方、中国地方が多い。その多くは新幹線で来ており、平成22年に開通した新幹線効果もあると思われる。最近では東京都や埼玉県といった関東からも来るようになり、また、垂水市長自らインドネシアを拠点とする教育旅行会社に働きかけて平成26年3月からインドネシアの生徒が民泊に来るなど、民泊を希望する学校も広範囲に及んでいる。

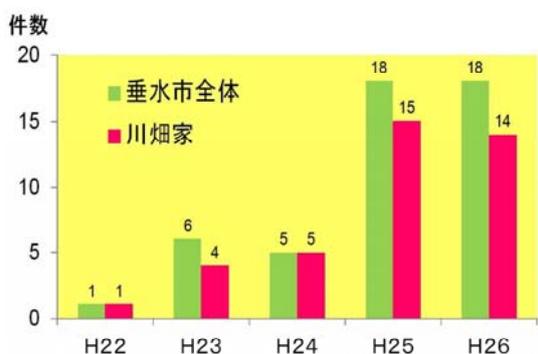


図3 民泊受け入れ件数

	九州	中国	近畿	関東	海外
福岡	4	山口 1	兵庫 11	東京 1	インドネシア 4
佐賀	2	広島 17	大阪 16	埼玉 2	
鹿児島	3	岡山 2	奈良 10	茨城 1	
			京都 2		
			滋賀 5		
計	9	計 20	計 44	計 4	計 4

図4 修学旅行で来た地域別学校数
(平成22年から5ケ年の計)

(2)民泊による漁業体験

垂水市に民泊に来た学校に対しては、垂水市に来ていただいた敬意を表するため歓迎セレモニーで垂水市長の歓迎挨拶のあと、さっそく各家庭に分かれていく。受け入れ民家は農業や元公務員、一般社員など様々である。

私の家に民泊する生徒には実際の漁業を体験させるようにしている。まず夕食で歓迎してコミュニケーションを図り、翌日には早朝5時半頃起床し、定置網漁業を体験させている。定置網漁業では、滅多に乗ることのない漁船にまず乗ることで驚きと喜びを感じ、実際に網を揚げることで漁業の面白さや大変さを体験する生徒が多い。さらに餌やり体験ではカンパチが子供たちの想像以上に勢いよく餌に飛びつく様子を初



写真2 漁業体験

めて見て、二重の驚きと喜びを感じる生徒が殆どである。私は、生徒達に垂水市の基幹産業である養殖業をもっと身近に感じてもらい、生産する水産物が食生活に非常に重要であることを彼らに教えながら、水産業について1つでも多くのことを学んでもらいたいと思う。このような体験を通じて、最初は魚が苦手だった生徒が魚に直接触れること

で自ら進んで包丁を握り，魚を捌き，フライなどの料理を自分で作るようになり，自分で作った魚を食べて感激して帰るようになる。

また，垂水市に来た思い出も作ってもらおうと午後からは足湯体験や桜島展望所など観光地にも案内している。最初は緊張気味な生徒達も帰りには「何もかもが初めての体験でとても楽しかった」「本当に親身になって接してもらった」などの感想を言ってくれるのが何よりの喜びである。僅か2～3日の滞在だが帰りには感謝の言葉をいただいたり，帰り際に涙する子供もいて，このときは民泊をやって本当に良かったと思う。



写真3 最後の別れ

(3)民泊による成果

民泊が開始された平成22年当初は，1人1日あたり5,000円の民泊費が受入れ家庭に支払われていた。私の家では平成22年度は1学校のみで計15千円が支払われたが，徐々に受け入れ件数が増加し，平成23年度と24年度は140千円が支払われた。平成25年度からは学校数も増え，2泊3日の滞在が増えたことにより1人1泊あたり6,100円の民泊費に値上がりし，年間400千円を上回るようになり，5カ年計で約1,136千円の民泊費が支払われた。垂水市全体を見ても，平成22年度の民泊費は1校のみで660千円支払われたが，徐々に増加し，平成26年度には延べ約4,000人が民泊し，民泊費は26,083千円となった。

また，垂水市への経済効果も上昇しており，市の試算によると平成25年度は約63,000千円に及ぶ経済効果が算出された。これは，民泊により肉や野菜といった食料品を入手する必要があるため，民泊は大きな購買力となっていることや，温泉などの観光資源にも連れて行くためお土産購入等による観光業等への経済波及もあることなど，民泊費以上の経済効果があると考えられた。

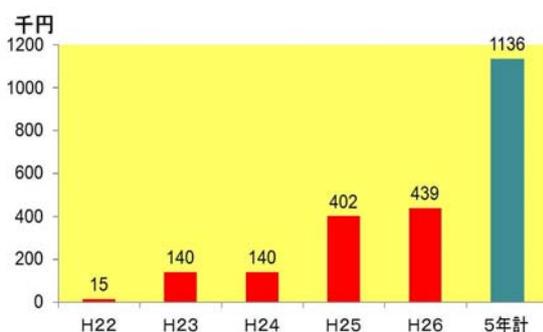


図5 川畑家の民泊費の収入

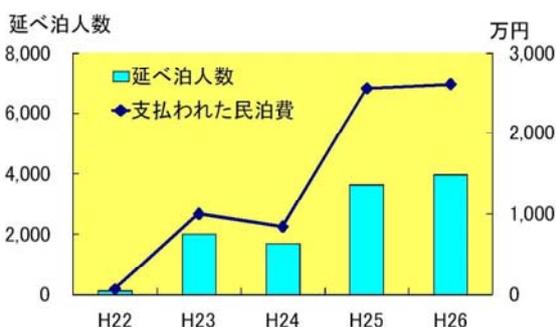


図6 垂水市の民泊人数と民泊費

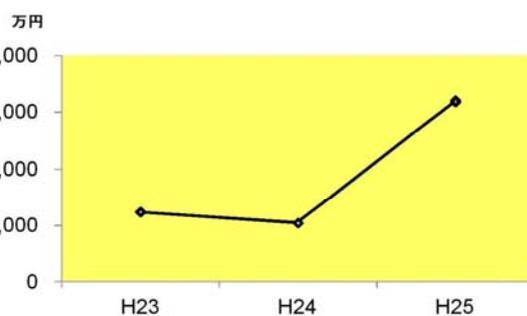


図7 垂水市の経済効果

※経済効果 = 1泊単価 × 延べ泊数 × 2.5 (垂水市観光業の経済効果指数)

6 波及効果

民泊受け入れが開始した平成 22 年当初は受け入れ登録家庭数は私も含めて僅か 14 家庭にすぎなかったが、その後徐々に受入家庭数が増加し、平成 26 年には 101 家庭にまでに増加した。現在、そのうち漁業関係は 17 家庭が登録されている。これは地域全体が一体となって修学旅行生を受け入れる気運が高まってきた成果と考えられる。

また、垂水市の主幹産業はカンパチ養殖を主体とした水産業であるが、民泊に来た生徒の受け入れ先は農家など様々な業種の方がいるため、中には漁業に触れないまま修学旅行を終える生徒もいる。このため、垂水市漁協としても地元の水産業を少しでも知ってもらう良い機会と捉え、学校側の要望があれば修学旅行の時間に合わせて漁業体験を受け入れるようにした。漁業体験は平成 22 年から始め、体験メニューはカンパチの捌き方教室、- 20 の冷凍庫体験、養殖魚への餌やり体験をメインとしており、学校から昼食の要望があれば漁協女性部に協力をもらいカンパチを使ったハンバーグやカンパチ寿司も昼食として生徒達に提供している。特に奈良県や滋賀県など海が無い県から来た生徒は漁船に乗ったり魚を捌くことが初めての生徒が多く、学校側からも漁業体験は非常に好評を得ているところである。

垂水市漁協では漁業体験費として生徒 1 人あたり 4,000 円を徴収しており、平成 25 年は 3,000 人以上を受け入れ、1,200 万円近い漁協収入があった。漁業体験に必要な漁船の傭船料、燃油費、捌き方教室のカンパチ代などは、この収入から充当している。このように垂水市漁協にとっても一定の成果が得られるようになり、僅かではあるが経営改善に向けて一定の効果があらわれ始めている。

また、これまで多くの生徒に民泊や漁業を体験してもらっている。漁業の面白さや魚の美味しさを実感し、感動する生徒も多く、彼らが地元に戻った後も積極的に魚を食べてもらうことで少しでも消費が拡大し、水産業界への貢献にも役立つと思われる。



写真 4 垂水市漁協の漁業体験コース

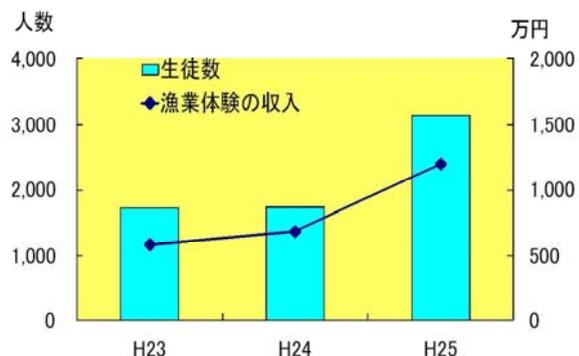


図 8 垂水市漁協の漁業体験受け入れ推移

7 今後の課題や計画と問題点

(1) 新たな地域開拓・新メニューの取組み

これまでの修学旅行生は近畿や山陽地方の学校が多く、これらの方面の中学・高校には修学旅行先の選択肢の 1 つとして垂水市が認識されるようになってきたのは一定の成果である。一方で関東や四国、北日本方面からの修学旅行はまだ少ないため、民泊開始の当初のように観光連盟や行政と協力して旅行会社や学校への営業活動廻りを積極的に

行い、垂水市の民泊を再認識してもらう時期に来ていると思われる。さらには鹿児島からソウル、上海、台北、香港への定期便も就航しているため、観光で訪れる海外のツアーメニューや修学旅行生に餌やり体験などを楽しむよう旅行会社などに情報発信していきたいと考えている。

また、ここ数年でようやく民泊が軌道に乗ってきたところだが、旅行会社や学校にとっては毎年同じメニューのため魅力が低減し、これまで来ていた学校が今年度になって来なくなるケースも見られるようになってきた。私はこのままでは民泊の取組みが停滞するのではないかと危機感を抱いており、これまでの定置網や餌やり体験といった漁業体験の他に、旅行会社や学校にも新鮮味を持たせるために新たな体験メニューの開発ができないかと思案中である。そこで悪天候時や降灰がひどい時でもできる水産加工品づくりを体験メニューに加えたいと考えており、現在、丸庄水産では新たに加工場の整備を進めている。この加工施設が出来れば、新たに干物や燻製などの水産加工品体験も新メニューとして積極的に取組もうと考えている。このように新たな地域開拓と体験メニューの開発により、各地から修学旅行生が来ることで持続的な民泊受入れが可能となり、さらなる地域活性化に繋がるものと期待している。



写真5 建設中の簡易加工場

(2) 最後に

民泊に来た生徒達の中には、鹿児島県がカンパチ生産日本一であることや、その中でも垂水市が最も生産量が多いことも知らない生徒が多い。民泊を始めた当初は、ただ思い出を残してくれれば良いと接していたが、夕食を共にしたり温泉に行ったりして家族の一員として生活することで親しくなる姿を見るうちに、垂水市の基幹産業である養殖業のことももっと関心を持ってもらいたいと思うようになった。生徒達は数年後には大人になります。民泊や漁業体験で得た素晴らしさを思い出し、1人でも多くの方が水産業に就業し、漁村で生活することで地域の街づくり、人づくりに繋がることを期待したい。そのためにも垂水市にある素晴らしい水産業を大いに活用して、今後も民泊と漁業体験を継続して行っていきたい。

修学旅行は生徒たちにとって一生の思い出である。私はこの民泊を通じて子供たちの人間としての成長に少しでも役立てればと思う。また、1人でも漁業に興味を持ってもらい、後継者に育ててもらえたら有り難いと思う。民泊に来た子供たちから手紙が寄せられるたびに、みんなの笑顔や涙が目に浮かび、心から「やって良かった」と感慨深く思うことが多い。垂水市へ来てくれたことに感謝し、これからも人間味あふれる民泊を続けていきたいと思う。

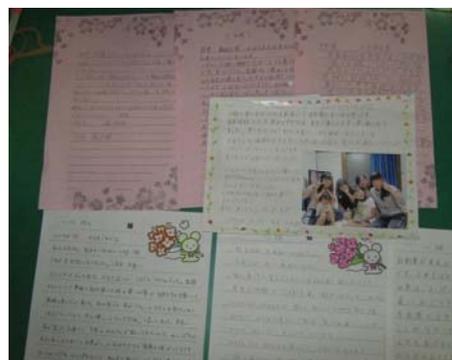


写真6 お礼の手紙